

美しくなつかしい、日本をのせて。

# Cradle

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

5

2012 May/June  
TAKE FREE  
NO.11

特集  
森敦生誕100年  
庄内憧憬  
三好徹 作家



Cradle 5

美しいなつかしい、日本をのせて。

〔クレードル〕

出羽庄内地域文化情報誌

平成24年5月1日発行(隔月奇数月発行) 第2巻5号(通巻11号)

発行／Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15 [株式会社 出羽庄内地域デザイナーズ] 電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3 [コマツ・コーポレーション] 電話0234(41)0012

あしたをつくる、チカラになりたい。



S 荘内銀行

庄内各地を転々とした森さんは、  
芥川賞を受けたあとで、庄内は帰るべき  
ふるさとのようになつた、と書いている。

## 森敦の作品と庄内。

### 三好徹



昭和56年、注連寺境内で行われた記念碑除幕式にて。  
左から、高野悦子、新井満、鶴岡市大山の山本清美とその友人、森敦、三好徹、森富子。  
写真=鶴岡市朝日庁舎

森敦さんが『月山』で芥川賞を受けたのは昭和49年1月のこと。森さんは62歳だった。芥川賞は作家に対してもうるものであつて、年齢は関係ないのだが、実際には若い文学者の作品が対象になつてゐた。60歳を過ぎたお年寄りの芥川賞作家の誕生に、世間はびっくりしたのである。

森さんは若いころ（昭和9年）に「東京日日新聞」（現在の毎日新聞）に『酩酊船』を連載したことがあつた。文学仲間の檀一雄や太宰治よりも先に文壇に登場した人なのであるが、師匠格の横光利一にいわれても次作を書かず放棄された。はじめは信州の松浪の旅に出た。はじめは信州の松本、ついで奈良に行き、東大寺の塔頭の片隅で居候のような生活を送つた。それは昭和10年7月のことである。市内在住の女性と知り合いになり、昭和16年5月に結婚した。新婦の前田暘は6歳下である。わたしは森さんに初めて会つたのは

昭和34年4月のことだつたから、ご両人の結婚生活は20年近くになつているのに、お子さんのいなせいか、いつ行つても、新婚さんみたいに睦まじい雰囲気だつた。夫人は、京都大学からケンブリッジに学んだ学者の娘で、本籍は山形県飽海郡北俣村である。そのあと、森さんの仕事は大森にあつた光学機械の会社で工場の主任だつたというが、具体的なことはよくわからない。はつきりしているのは、戦中戦後にかけて食糧事情の悪いときに、夫人の故郷へ酒田からバスに乗つて行き、米その他を調達したことである。また夫人が酒田市の病院に入院したとき、森さんも滞在して庄内各地をたずね歩いた。そして庄内各地の吹浦、酒田、狩川、鶴岡、大山、湯野浜、加茂あたりを転々とした。芥川賞を受けたあとで森さんは、庄内は帰るべきふるさとのようになつていった、と書いている。

夫人は本当にきれいな人だつた。そういう形容があるかどうか知らないが、庄内美人の典型といつてもよかつたのではないか。森さんが忙しくなる前に、わたしは狭いアパートに暮らしていた森さん夫婦をたずねるとき、必ず日本酒かウイスキーを1本、持参した。夫人は日本酒好きだったが、和洋どちらでも本当においしそうに口に含んだ。『月山』その他の庄内を題材にした作品は、夫人と結ばれたら生きられたのだと思う。つまり、それは森敦・暘の子ども同然なのである。

森さんは、大正元年（1912）生まれ、生きていれば百歳である。平成元年に急死したが、その作品はこれからも長く人びとに読みつがれるだろう。

みよし・とある／1931年東京生まれ。新聞記者を経て作家となる。記者時代に森敦と知り合い、多くを学ぶ。67年『風塵地帶』で日本推理作家協会賞を受賞。68年『聖少女』で第58回直木賞を受賞。『聖少女』では『小説ラストボロウ事件』、歴史小説では『興亡伝』『史伝新選組』『沖田総司』『高杉晋作』、評伝で『チエ・ゲバラ伝』『緒方竹虎』（福岡出身についているが、生まれは山形県）がある。



# 森敦 生誕100年

特集

62歳で第70回芥川賞を受賞した作家・森敦。その受賞作「月山」は戦後の山形県朝日村を舞台に描かれました。その14年后に第40回野間文芸賞を受賞した「われ逝くもの」「とく」。この作品もまた庄内を舞台にくり広げられる物語でした。森敦と庄内を結びつけたものは何なのか、生誕100年を迎えた今、ふり返ります。

取材協力||森富子、新井満、注連寺、森敦文学保存会、旧月山祭実行委員、鶴岡市教育委員会、月山あさひ博物村（文化創造館）  
トピラ写真||黒井卓也　月山祭写真||鶴岡市朝日庁舎　書影・座談会撮影||Crade編集部



## 特別寄稿

森敦を世に送り出し、最晩年まで作家人生を支えた、  
養女の森富子さん。父が語った庄内の懐旧の旅を  
振り返り、今回、特別にご寄稿いただきました。

森敦

Special Edition



# 恋いこがれた庄内

作家 森 富子



写真=黒井卓也



もり・とみこ●福島県生まれ。実践女子大在学中、「焼酎屋台」が第1回学生小説コンクールに入選し、「文藝」に掲載される。森敦が加わっていた「立像」の同人となり、その後、東京書籍で国語教科書の編集に携わる。後に、森敦の養女となる。『森敦全集』を編纂。作品に「花嫁御寮」「聖夜」「杉荘十一号室」「擬似家族」「森敦との対話』がある。

て身体を盾にして奈落の底が見えないようになってしまった。手を差し伸べると、階段を下り出した。そんな状態なのに、月山祭に行くと言う。  
「ぼくは、月山祭に、這つても行く！」  
その言葉に、恋いこがれる庄内への想いを感じた。私は応えた。  
「私が、月山祭に、背負つてでも連れて行く！」

平成元年7月に逝ったのだが、亡くなる日まで、「這つても行く」「背負つてでも連れて行く」とのやりとりを朝に晩に繰り返した。

父森敦が長い放浪生活を打ち切って、鶴岡市大山から上京したのは、昭和40年、53歳の時である。蓄えが底をつき、旅費や当座の生活費を借金しての上京であった。その借金を懐に入れて、車中の人になつたのだが、上着のポケットに入れた財布が盗られてしまつたという。上京してまた借金したので借金が2倍になつたと苦笑した。いよいよ庄内を去る決意をした時、本間藤広さんという青年に、トラックで日本海沿いを案内してもらったという。庄内平野の景色を目に焼きつけて、名残を惜しんだのだろう。

何度も嬉しそうに「トラックで例によつて小旅行中です。(昭和30年6月25日、小倉克之あて)」  
〈金もないのに月山を見つつ汽車で一周しなかつたのです。乗客は素朴で、汽車はのろく、それはまあ愉快でしたがたえず雲がかかつて旅行は失敗でした。(昭和30年6月25日、湯浅隆宗あて)」

ドライブ」の話をして、「見る場所によつて、月山も鳥海山もその形が変わるのだよ」などと語った。私は、話を聞きながら、まだ見ぬ月山や鳥海山の山容を脳裏に浮かべていた。

吹浦、酒田、大山と移り住んだ頃、友人に数多く手紙を書き送つた。その手紙に「小旅行」の記述がしばしば出てくる。

〈例によつて小旅行中です。(昭和30年6月25日、小倉克之あて)〉  
〈金もないのに月山を見つつ汽車で一周しなかつたのです。乗客は素朴で、汽車はのろく、それはまあ愉快でしたがたえず雲がかかつて旅行は失敗でした。(昭和30年6月25日、湯浅隆宗あて)〉

30年6月頃、湯浅隆宗あて)

この小旅行する姿が、デッサンの旅をする画家と重なつてしまふ。

森敦の場合、地形や山容を探求するための小旅行であったのだろう。

〈セザンヌは生涯をかけてサント・ヴィクトワールを描いた訳ですが、

セザンヌが描いたのは風景であつたのか地形であつたのか。地形でなくしてどうしてセザンヌの脳裏に

エレメント——絵家ですからむろん幼稚なものですがない——という思

想が浮かび得たのか。エレメントの抽出なくして果たして構成が可能であろうか。(昭和30年6月頃、湯浅隆宗あて)

私は『月山』『われ逝くものの

ごとく』の冒頭を読んで、小旅行の成果が文章になつた気がした。

毎年8月末に行われた「月山祭」はわが家の正月であった。友人知人を誘い、エツセイに書いて全国の皆さんを誘い、指折り数えてその日を待つのが常であった。

最晩年になつて歩行が困難になり、2階の書斎から1階の寝室に移るために階段が下りられないと言い出した。階段の上から眺めるのだろう。そこで、私が先に下り連れて行く！」

吹浦からもよく見えます。遠くから見ればそうでもないが、深くその腹に入ればサント・ヴィクトワールに似ています。(昭和30年7月頃、柴田四郎あて)

『月山』を書く時、5万分の1地図をつなぎ合わせて、「月山周辺の地形を書きたい。月山の山中にある注連寺から月山の頂が見えるのだよ」と、デッサンのような絵を描いて語った。

7月頃、柴田四郎あて)

小説「月山」の舞台となつた  
朝日村の人々が語る、森敦と月山祭

**記念碑**

森敦は生存中に碑が建つことを  
固辞していましたが、朝日村の人々  
の熱意にほだされて、昭和56年8  
月28日、注連寺境内に森敦の筆に  
よる碑が建ちました。

森敦さんとの出会い

春山  
皆さんと森さんとの出会いをお聞きしたいのですが、伊藤明栄さんは森さんが注連寺に滞在した頃からのお知り合いでした。 んだ。昭和26年9月頃に我々“わかぜ”が集まつて注連  
黒井　あさんたちが寺から降りきて、「おらほの住職が今度連れてきた人は、今までの人とは違う」つていったなやの。そしていうから、どうだ人だろって思つたのを覚えてる。

伊藤　春山  
春山　皆さんと森さんとの出会いをお聞きしたいのですが、伊藤明栄さんは森さんが注連寺に滞在した頃からのお知り合いでした。 んだ。昭和26年9月頃に我々“わかぜ”が集まつて注連  
黒井　あさんたちが寺から降りきて、「おらほの住職が今度連れてきた人は、今までの人とは違う」つていったなやの。そしていうから、どうだ人だろって思つたのを覚えてる。

黒井　私の場合、小説「月山」と

寺の階段で遊んでた時、ばあさんたちが寺から降りてきて、「おらほの住職が今度連れてきた人は、今までの人とは違う」つていったなやの。そげっていうから、どげだ人だろつて思つたのを覚えでる。

の出会いが芥川賞受賞前年の昭和48年、『季刊芸術』を鶴岡の本屋で立ち読みした時です。自分も少年時代に似たような経験をしたことから、非常に親しみと共に感を覚えて、作者の風貌や人柄を想像しながら読みました。本人との出会いは朝

すべての吹きの  
寄するところ  
これ月山なり

森敦は碑文に刻まれたこの文を、  
人から求められると好んで揮毫し  
たといいます。





日村役場で観光係をしていた昭和51年頃、森さんと小川さん(おとぎの森)にて

るという「フジテレビの『小川宏ショーカン』の実況中継を手伝った時です。

なやの。その中で実践できる  
ことはやろうと、森先生の  
文学記念碑の話が生まれま  
した。記念碑の石は黒井さ  
んとふたりで探したつけの。

黒井 田麦川の支流の谷底にあつた石を見つけて、一番大きいクレーン車で引き上げてもらいました。注連寺の境内さ運んで置いたら、石の稜線と月山の稜線がうまい具合に重なるなやの。

記念碑になるべくして選ばれた石だつたんです。碑文は小説中にはない言葉だから、森さんに依頼したわけですよ。

書いてもらいまして、黒井さんとかと東京さ何回か頼みに行つたなやの。その後、記念碑の除幕式についても相

書いてもらいま、黒井さん  
とかと東京さ何回か頼みに  
行つたなやの。その後、記  
念碑の除幕式についても相  
ですよ。

書いてもらいまして、黒井さん  
とかと東京さ何回か頼みに  
行つたなやの。その後、記  
念碑の除幕式についても相  
れた石だつたんです。碑  
文は小説中にはない言葉だか  
ら、森さんに依頼したわけ  
ですよ。

**春山**　除幕式に合わせて月山祭も始まつたわけですが、その辺りのエピソードを聞かせてください。

談したりしての。

山」監督の村野鐵太郎や画家の司修などの芸術家、庄内の文化人など、計40人近い人たちが森敷

山懷紅石  
注連者之  
新橋花火  
蚊帳をつくり  
吹雪に耐え  
蘭のゆづの香  
のふことく天主  
夢見たり

# 『森敦と月山』

300名の参加者に感動を与えました。

除幕式

小説「月山」に出てくる和紙の蚊帳に似せた楕円形の白幕を、除幕式用に製作。普通であれば幕を下ろすところを、「天の夢」と記された幕は、上に引き上げられ、



# 森敦

*Special Edition*

者の6割が県外の方だった

「森の花見」で、和紙の蚊帳の中での参加者が森先生と対話する企画をした時でねが。

**黒井** 出羽三山の弥勒淨土・阿弥陀淨土・觀音淨土になぞらえて三つの蚊帳を作つて、その中で森先生と一対一で話しができるようにしたん

渋谷です。それが喜ばれました。  
大体ひとり3分程度という  
ことで時間設定しての。月

昭和56年から森敦没後の平成8年まで  
毎年8月には、全国各地から森敦を慕うたくさんの  
人たちが注連寺に集まり、月山祭を楽しみました。

今まで  
を慕うたくさんの  
を楽しみました。



卷之三

のおかげでした。本当に恩義に厚い人での。月山祭9回の目前で亡くなつたわけだけど、たとえ担架で運ばれても月山祭には来ると言つて、事実、車椅子になつてからも来てくれましたからね。それと、文学界でも高い位置にいるのにもつけ

だほど人を選ばない。人物  
が大きいから小さなことに  
こだわらない。それが優し

さに通じるんでないかなあ  
だから月山祭が垣根を越え  
た隔たりのない場になつた。  
私はその時その時の対応が  
非常に上手な人だつたと思

# 森敦

*Special Edition*

学祭は希少なので、その意味でも非常に貴重でした。黒井あの時代に小説「月山」を発表した森敦。今読み返しても思うけど、「月山」を読んだことで、人はどこに住み、生きようとも、人としての生き方や世界観は同じだよ、ということを教えてもらつた気がします。

若手作家の登竜門である芥川賞を、森敦が高齢で受賞した理由もそこにあつたん

春山 黒井 やの。  
それは森さんの人徳だの、  
しかもほとんど手弁当だつ  
たんでしょ（一同笑い）  
それだからできたんです。  
その世界の常識を知らない  
もんだから。でも結果とし  
てできたのは森さんの人徳

印象的なのは「私を利用し  
て朝日村がよくなるようであ  
ればいくら利用してもいい」  
っていう言葉で、だか  
ら月山祭にも芥川賞作家や  
著名な文化人を何人も連れ  
てきてくれて。文化面でも  
過疎から脱却させたいとの  
思いが森さんにはあつたな

たつけの。  
遠くは北海道、九州、沖縄  
からもあつたよ。

**森敦の人柄**

春山

実際に親交を重ねる中で、  
森さんの人柄はどんな印象  
でしたか。

帶刀

とにかくわれわれ若い人さ  
もうやさしい人だつけの。お  
前たちはおつきい心を持た  
ねばダメだつての、地域文  
化に対する一生懸命なこと  
を感じるつけの。



# 森文学ツアーリ

「われ逝くものの」の連載が終了した翌年の昭和63年月山祭翌日、物語の舞台をバス2台でめぐる「文学散歩」を開催、森敦も車椅子で参加しました。逝去してからは、文学保存会代表の春山

進さんを案内人とする文学ツアーや何度か実施。生誕100年を迎える今年は、NHK文化センターで庄内教室で春山さんによる文学講座ツアーやあるほか、本誌発行元の(株)出羽庄内地域デザインでも特別ツアーや企画を開催します。

座談会出席者



座談会出席者

右から 司会・春山進さん（森教文  
学保存会代表）、元月山祭実行委  
員の帶刀春男さん、黒井卓也さん  
伊藤明栄さん、渋谷幸一さん。

A portrait of a middle-aged man with glasses, a brown jacket, and a blue shirt, smiling at the camera.

卷之三



どこに住まいし、どんな生き方をしようと、失つてはならない大事なことがある。  
それはひとの生き方の世界観であり、死生観の人生観であろう。



驚くほど軽量で、しなりがよくて  
使いやすさ抜群の「楳島ほうき」は  
昔ながらの知恵と作り手の思いがつまつた  
古くて新しい、生活道具

## 庄内町の 楳島ほうき

古くから「暴れ川」と呼ばれる最上川。その傍らに、河川が氾濫するたびに右岸から左岸へと位置を変えてきた楳島という集落がある。「楳島ほうき」は、そんな厳しい環境の中で生まれ、作り続けられてきた座敷用のほうきである。

座敷ほうきはイネ科のほうききび（正式名ホウキモロコシ）を材料とする。楳島ではその苗を6

月初旬に畑に植え、8月末に刈り取り、3週間天日乾燥させた後、材料を選別し、冬にほうき作りをする。肥料も農薬も不要で、あつという間に2メートルまで成長するこの作物は、不安定な土地にある楳島の人々に生活の糧を与える救い主だつただろう。農閑期、男衆がほうきを作り、女衆が行商して収入を得てきたという。

一昨年、時代の推移の中で作り手が2名となり、伝承が途切れそうになつた時、復活の波が訪れた。材料栽培から手塩にかけて作る「ものづくり」が今も残されていること、モノ自体が座敷から玄関や納屋へと場所を変えながら20年以上も愛用できること、こうしたモノの真価を見出す人たちが現れたのである。「種から蒔いて使い手に合わせて自在に作るこのほうきが宝物に見えた」という中原浩子さんは、楳島ほうき復活プロジェクトの発起人。「日本のいいモノを求めていた全国の人たちが、ほうきを通して繋がりました。今後はこの人と人の繋がりをさらに広げていきたいです」。

利便性という名のもとに大量生産・大量消費のサイクルに踊らされてきた私たち。道具とは何なのか、モノと暮らすとは何なのか、忘れかけていた心を、一本のほうきが教えてくれている。



楳島ほうきは約90cmの「座敷ほうき」から約20cmの「ピコほうき」まで、さまざまなサイズがある。来年は服飾雑貨を広く手がける東京の「BEAMS」で販売予定。また、ほうききびの栽培、楳島でのほうききび定植・刈取など楳島ほうきの未来と一緒に作る「楳島ほうき応援隊」も募集中。詳しくはfaxかmailで下記まで。

楳島ほうき手作りの会（日下部会長）  
●FAX.0234-43-4007 ●Mail: magi.houki@gmail.com

